

ポラステ  
つなぐ  
ストーリー

11

卒業後の自分を想像する  
センパイからのメッセージ



つつい しげき  
筒井 茂喜 さん

2010年3月 修士課程修了 / 2013年3月 博士課程修了 /  
2026年3月まで兵庫教育大学教授 2026年4月から神戸女子大学教授

### 筒井先生の座右の銘を教えてください

「焦らず 休まず 諦めず」

大学院に入学したときに、社会科教育学の故岩田一彦先生がゼミ生におしゃっていたことで、私もその通りだなあと思って、この時からずっと学生やゼミ生に使わせてもらっています。

そして、私も自分自身に言い聞かせています。

### 筒井先生がお好きなスポーツは何ですか

ハンドボール、サッカー、バスケットボールで、いわゆるゴール型ゲームです。私は、ずっとハンドボールをしていました。息子は、ずっとサッカーをしていました。そういうこともあって観るのも好きです。去年は、なでしこジャパンの試合とか、サッカー日本代表の試合などを、吹田市や豊田市の方まで観にいきました。東京に行って、天皇杯の試合を観たこともあります。サポーターの姿も好きです。応援が楽しいです。野球とは違う楽しさがありますね。

## 筒井先生は、なぜ教員を目指そうとされたのでしょうか

高校生の時は、医者になりたかったんです。でも、なりたいと思っていただけですぐにくじけました。数学ⅡBのあたりからあやしくなってきた、数Ⅲは無理だと諦めました。

その後、なぜ自分は医者になりたかったのかと考えると、やはり、患者の病気を治す、人を助けるといのはいい仕事だなあと考えていました。自分自身も病気を治してもらった経験があったから、医者になりたかったんだと思いました。その点でいえば、物を売ったり、物を作ったりというのは除外されました。

教員は、身体を治すことができませんが、子どもの心に寄り添ったり、身体の成長を促したりできるいい仕事だと思って、教員を目指しました。

## 大学時代の筒井先生が一番思い出に残っていることを教えてください

思い出に残っていることはたくさんあるのですが、教員になって20代、30代の教員になった自分を支えてくれた出来事があります。

私は、ハンドボールをしていたんですね。大学の三回生でキャプテン、主将になったんです。その大学はハンドボールリーグの関西3部に所属していたんです。秋のリーグで1勝5敗で、4部に降格してしまいました。自分自身、とても責任を感じ、どうしたらいいのか、色々悩みました。

そのときに、先輩から、バスケット部の方だったんですが、「自分で考えているか」と言われました。つまり、「ハンドボール、どんだけ知ってるんや」「自分は今まで人に言われたことをやっただけちがうか」と言われたんですね。言われてみれば、ずっとそうでした。中学校も高校の時も先生の言う通りにやって、大学でも先輩たちの言う練習を考えずにやっていたんです。はじめて自分で考えやったことなかったなと思いました。

そこで、本屋に行って、ハンドボールの本を2冊分厚いのを買いました。ノートを買って、本を読んで、攻撃、守備の知識をノートにまとめて、春のリーグに向けて練習方法を考えました。それを後輩たちに伝えて、ミーティングを何回もしましたね。優勝目指して、3部にあがろうと春リーグに向けて臨みました。そして、春リーグで、6戦全勝で入れ替え戦に進み、入れ替え戦も勝利し、3部にあがりました。その経験が20代、30代の教員筒井を支えてくれたなと思います。

自分で知識を得て、自分で考えて、自分で実行するって、こんなにも自分を強くしてくれるんだと思いました。これとは別に、得たのは、同級生や後輩がついてきてくれたことでした。私は口に出して「あーだ、こうだ」と言えないんですが、私の姿が何か変わったところを見て、「そんだけ頑張るんやったら俺らもやろうやないか」と思ったと後から聞きました。そのことも、教員としての自分をとても支えてくれました。

## 大学時代にされていたことで教員として役立ったことを教えてください

ハンドボールでの学びです。とにかく、自分で調べて、自分で知識を得て、自分で考えて、試行錯誤して学んでいくというのは、教員の基本かなと思います。

## 教員として大学時代にしていればよかったと思われたことがあれば教えてください

大学では、運動生理学の研究室にいました。研究室の先生が研究熱心な方で、土日になったら「俺の研究を手伝え」と、同級生のゼミ生3人がスポーツ科学センターに連れていかれたんですね。今考えるとすごいと思うのですが、そこでボートの日本代表のオリンピック選手を被験者にして、心拍170下でどれだけの仕事量ができるか、ローイングエルゴメーターという器具を使って、二酸化炭素、酸素摂取量、体温、パワーとかを調べる実験をするんですね。

私は、先生の言われたことを何気にやっていただけだったんですね。今から思えば、あんなにすごいことをされていたのに、先生に自分から質問して「この研究はどういう意味があるんですか」って、なぜもっと学ばなかったのかと、大学を卒業してから思いました。

これは、今の学生にも伝えたいことです。「大学で新しい技術・知識を得て、きちんと覚えたらいい先生になれると思っているのではないですか」と学生に問いかけるんです。「それだけでは、十分ではありませんよ」「いい先生にはなれませんよ」って言うんです。学生には、



「知って、考えて、わからないとあかんで」「知ってなんでそうなのと考えると、じゃあそれってどんな意味があるのって考えて、意味をわからないとダメですよ」という話をします。

## その後大学教員に転職されたのはどうしてですか

大学卒業するとき、実は兵庫教育大学の院を受けてたんです。教員採用試験も受けてたんです。2つ受けたんです。

なぜ、院を受けたのかというと、先程の話ですが、卒業する前に、「ゼミの先生のやってることはすごいことちがうか」と思って。また、自分自身も中学2年生を対象に授業中の運動量を調べて卒論で書いたんです。そこで研究っておもしろいなと思ったんです。そういうことがあって、もう少し研究したいなという気持ちも芽生えて、ちょうど、「兵庫教育大学大学院というおもしろい院ができた」とゼミの先生が教えてくださいました。「じゃあ地元やし、受けようか」と思って受けて、採用試験も兵庫県を受けて、たまたま両方合格したんです。

ただ、40年前は院に行く人はほとんどいなくて、父親が「もういいかげんに働け」と。確かに院に行ったらまた親のすねをかじることになります。当時は、大学卒業したら、みんな働く時代だったので、じゃあもう働こうかと働きました。小学校教員はおもしろかったんです。

ただ30代半ばで、ちょっと行き詰まり感があったね。学級がうまくいってないとか、そんなことじゃなくて、自分自身、「これ以上成長できるのかな」という行き詰まり感があって、院に行きたいと。院に行きたいということが一つと、40くらいになった時に、校長先生から、指導主事を受けるように、県を受けるように、教頭試験を受けようように、と言われ、それは自分にとってまだ違うなということを感じ、大学院という選択をしました。そこから研究を続け、大学教員になりました。

## 兵庫教育大学教職キャリア開発センター長として、ボランティアステーションに関わっていただいていたのですが、ボランティアステーションに対してどんな印象をもたれていましたか

一番印象深いのは、「子どもフェスタ」です。「子どもフェスタ」に来ている子どもたちは、どちらかというと学校に居場所があまりない、行き辛い子どもたちです。繊細な表情をしている子どもたちに接する学生の優しい、、、優しいとは違う、いい言葉がないんだけど。子どもたちがスッと学生に

ついていくんですね。拒否せずに。あの距離感のなさね。あれを見たことがボランティアステーションで一番印象深かったです。こういう学生たちにぜひとも先生になってほしいなと思いました。一番弱い子どもたちの立場になって考えられる学生違うかなって印象深かったです。

## ボランティア活動についての筒井先生のお考えをお聞かせください

私の研究の関係で京大の総長をされていた、ゴリラ研究の山際先生や、京大のチンパンジーを研究されている方の本を読むと、人間とゴリラやチンパンジーは遺伝子的には99パーセント同じだと、なのになぜ人間は人間になっていくのに、ゴリラやチンパンジーは類人猿なのか。その中で彼らと人間の大きな違いは、「共感力」。「共感力」の高さが決定的に違う。テレビの向こうのアフリカの子どもたちに涙流すことができるのは人間しかいない。じゃあなぜ人間はそれほど『共感力』を高めたのか。それは、原始の時代、人間は非常に弱い動物だった、背も低くて爪もない、牙もない、腕力もない、足も速くない、だから肉食獣の格好の餌だった。その時にじゃあ人類はどうやって身を守ったか。集団を組んだ。その時に血縁を超えて集団を組む必要があった。そこで相手を思いやる力がないと集団が組めない。その最も大きな集団を組んだのがホモサピエンス。集団が小さかったネアンデルタール人は滅んでいった。そういう進化の過程で、「共感力」というのが人間が人間らしい、人間を作り上げる上で最も必要な力。と考えた時、ボランティアの学生の姿は、「共感力」高いなど、ボランティア活動ってまさしく人間らしい、人間だからこそできる活動だと思います。その姿があの学生の姿だと思います。



「子どもフェスタ in 兵教」参加団体関係者交流会での様子

## 昨年度、ボランティア団体交流会に参加していただきました。その時の感想をおきかせください

あの団体の方々も非常に優しい、「共感力」の高い、仲間思いというか、子ども思いというか、あの「ボランティア団体交流会」に集まっている人たちって、まさしく先程の話ですが、「最も人間らしい力『共感力』の高い人たちだ」と

思いました。ああいう輪が学校の中にも広がっていくことが、学校をよくしていく一番の基本ではないかと感想をもちました。

## 教員を目指す学生に今大切にしてほしいことをお聞かせください

兵教のキャリアセンターのセンター長をして感じたのが、一定数いるんですね。何がいるかっていうと、教員になるかどうか、悩む学生が必ず一定数います。採用試験を受けている学生の中にも、悩みながら受けている学生が結構います。そういう学生と話をすると、やっぱり「自分は、教員にふさわしいかどうか」みたいな話になるんです。けれど、ふさわしいかどうかなんて、結局、「他人を感じる」「周りの人が感じる」ことで、自分ではどうしようもない、コントロールできないことだと思うんですね。なので、そんなことよりも自分の中の物差しを大事にしてほしいなと思うんです。例えば、実習に行って、自分が関わった子どもがちょっと勉強できるようになった時に、または、子どもが笑顔になった時に、やりがいをすごく感じて、自分の存在意義を感じたならば、私は、教員を目指してほしいし、教員に就いたらなと思います。

## なりたと思った教員になったとき、くじけないため、教員を続けるために、学生の今、体験しておいてほしいことを教えてください

神戸大学におられた松尾先生が言われていたことなのですが、「会社に入った同じ社員でも、3年後には力の差が生まれる、それはなぜか」という研究をされた方です。800~1000人という数の人事担当の方にインタビュー調査をして、伸びる新任、辞めない、強い新任社員には共通点があることがわかった。それは何かというと、どれだけ人と関わっているか。関わる人の多さだと。どれだけの人間から刺激を受けて関わっているか。その多さが決定的に違っていたということがわかった。そこから、私が兵教のキャリアセンターのセンター長をして学生によく言ったのが「とにかく色々なコミュニティに所属しなさい」「ボランティアステーションも大事だし、クラブも、大学以外のコミュニティも」「色々なコミュニティに所属することで、刺激を受け、人との間で学んでいく」「自分の強さとかは人との関係でしか育っていかないの、なるべく多くの色々なコミュニティに所属して、活動してほしい」など。それが必ず教員としての自分を支えていく力になると強く思っています。 関わり合う人間の多様性によって自分の幅が広がりますよね。